

試験日 : 2026 年 2 月 21 日 (土)
入試種別 : 大学院入学試験(4 月入学)修士課程 春期試験
学部・研究科 : 文学研究科 日本語日本文学専攻
科目名 : 専門科目

解答又は解答例

〔一〕

【A】

- 問一 ①ワ行上一段動詞「ゐる」の連用形＋尊敬の補助動詞「たまふ」の終止形＋婉曲（推量）の助動詞「めり」の連用形＋過去の助動詞「き」の連体形
②ハ行四段動詞「思ふ」の連用形＋謙譲の補助動詞「きこゆ」の未然形＋尊敬の助動詞「さす」の連用形＋尊敬の補助動詞「たまふ」の連体形
- 問二 (例) 藤壺宮所生の若宮を次の東宮とするのに際し、母方がみな皇族で彼を後見できるような政事に通じた人がいないため、せめて母である藤壺宮だけでも不動の地位に据えて、皇子の支えにしようと考えたから。
- 問三 (例) 本来であれば、藤壺宮よりも先に入内し、しかも東宮である第一皇子を生んだ自分こそが皇后となるにふさわしいはずなのに、藤壺宮が自分を越えて立后したことに對して不満を抱いた。
- 問四 ㊦ (例) ご寵愛
㊧ (例) 道理に合わない、どうしようもない
㊨ (例) 成長する
- 問五 (例) 光源氏の藤壺宮に対する、さらに手の届かない遠い存在になってしまふことへの悲嘆を痛切に感じる心地。
- 問六 つきもせぬこゝろのやみにくるゝかな雲井に
人を見るにつけても
- 問七 (例) 尽きることのない思いに満ちた心の闇にくれ惑うことよ。はるか遠く、宮中の人になったあなたを見るにつけても。
- 問八 (例) 藤壺宮が光源氏そっくりの我が子を見るにつけ、密通の露見することを恐れていること。
- 問九 (例) なるほど、どのように作り変えたならば、光源氏に劣らぬお方がこの世にお生まれになるだろうか、いやそのようなことがあるはずもなかろう。
- 問一〇 《採点のポイント》『源氏物語』成立以前および以後の文学作品等との影響関係を具体例も挙げて説明した上で、『源氏物語』固有の卓越した特徴に言及していること。

【B】

問一 （例）葉山芳樹 『セメント樽の中の手紙』

問二 （例）当時の既成文壇においては、自然主義や私小説の作家によるリアリズムの作風が評価されていた。『破戒』の島崎藤村、『蒲団』の田山花袋をはじめとする明治期以来の作家の作品に加え、徳田秋声や正宗白鳥らは代表作を大正期に著した。武者小路実篤や志賀直哉ら白樺派における私小説は、大正末頃からあらわれはじめる。

問三 （例）『檸檬』

問四 （例）一九〇三年、東京に生まれる。高等学校時代に室生犀星と芥川龍之介に私淑し、東京帝国大学に進学。卒業と同じ一九二九年に『不器用な天使』を発表して文壇に登場したが、胸部疾患による病床生活が続く。『聖家族』（一九三〇）、『恢復期』（一九三一）、『燃ゆる頬』（一九三二）、『美しい村』（一九三三）などにはラディゲやプルーストの心理主義文学の作用が認められる。昭和十年代には自身の愛の体験にもとづく『風立ちぬ』（一九三六―三七）を発表する。

問五 『文藝時代』

問六 菊池寛 （例）『恩讐の彼方に』

問七 一九二四年一〇月に創刊された文芸同人雑誌『文藝時代』を拠点とした新進作家、横光利一、川端康成、片岡鉄兵、中河與一、今東光、岸田国士などを総称して「新感覚派」と呼ぶ。同誌創刊号に掲載された横光の短篇小説『頭ならびに腹』に注目した千葉亀雄が、その表現法の奇抜さについて評論「新感覚派の誕生」（『世紀』一九二四・一一）を書く。これが「新感覚派」呼称の最初となる。擬人法的、象徴主義的文体に特徴があり、ルナールの『葡萄畑の葡萄作り』やポール・モーランの『夜ひらく』などからの影響もみられる。

【C】

問一 人形浄瑠璃（文楽） 歌舞伎

問二 心の仮装

（例）近世の社会で生きてゆくために、人々がふだんは隠している本来の身分や事情、また本心。

問三 しんていげき

（例）登場人物が、本来の身分あるいは社会に対して隠しておきたい本心を隠しつつ、重大な事案を秘密裏に進めようとするが、ある決定的な段階に至ったとき、そのために行った犠牲的行為が明らかになり、「見えざる仮面」を脱ぎ捨てて本来の身分や本心を表す。そうした構造を持つ演劇の作品のこと。

問四 (例)『義経千本桜』二段目切「渡海屋・大物浦」

船問屋渡海屋の主人である銀平は、実は源氏に滅ぼされた平家の武将・平知盛で、平家を滅ぼしたのち源頼朝と不和となり九州に逃れようとしている源義経の一行を、海上で討とうと考える。しかし失敗して、自らの子・お安としてかくまっていた安徳天皇を義経に渡し、大物浦で碇をかついで入水する。

問五 4

問六 (例) 能の作品で、前半と後半の間に主人公（シテ）がいったん退場することがある場合、その前半の姿をさす。

問七 (例)『道成寺』

【D】

問一 ① 無声声門摩擦音 ② 有声歯茎閉鎖音 ③ 無声両唇閉鎖音
④ 有声軟口蓋閉鎖音

問二 当該問題は、受験生の今後の研究に必要となる基礎的な知識を問うものである。設問の性格上、解答例の提示はなじまないことから、以下に採点のポイントを示す。

- ・入学後の円滑な研究遂行が可能となるような、日本語学の基盤的な知識を身につけていることが理解できる記述内容であること。
- ・適切な具体例を提示し、それに基づいて各用語の説明ができていること。
- ・アカデミック・ライティングの基本に則り、正しい表記および文章表現で書かれていること。

問三 当該問題は、受験生の今後の研究に必要となる基礎的な知識を問うものである。設問の性格上、解答例の提示はなじまないことから、以下に採点のポイントを示す。

- ・入学後の円滑な研究遂行が可能となるような、日本語学の基盤的な知識を身につけていることが理解できる記述内容であること。
- ・適切な具体例、時代背景、書名、日本語学上で問題となることなどを示しつつ、分かりやすく説明していること。
- ・アカデミック・ライティングの基本に則り、正しい表記および文章表現で書かれていること。

〔二〕

当該問題は、本専攻の「入学者受け入れの方針」を踏まえ、専攻分野に関する基礎的な研究能力の一環としての、自身の研究分野を含む日本語日本文学についての基本的事項の広範な知識、および言語表現能力の有無を測定するものである。設問の性格上、解答例の提示はなじまないことから、以下に採点のポイントを示す。

- ・入学後の円滑な研究遂行が可能となるような、日本語日本文学に関する基盤的な知識を身につけていることが理解できる記述内容であること。
- ・具体例なども適切に示しつつ、分かりやすく、かつ正確な文章で説明していること。
- ・アカデミック・ライティングの基本に則り、正しい表記および文章表現で書かれていること。